

死後の世界と死者儀礼

— *Garuḍapurāṇasāroddhāra* 和訳(1) —

堀 田 和 義

はじめに⁽¹⁾

本稿は、ナウニディラーマ (Naunidhirāma, 18 世紀) が著した *Garuḍapurāṇasāroddhāra* (以下, GPS) の和訳である。自注の記すところによれば、著者は、ジュンジュヌーナガラ (Jhūñjhuñūnagara)⁽²⁾ のシュリーシャールドウーラ (Śrīśārdūla) 王に^{プラーナ}古譚を語る者 (purāṇasya vaktṛ) であったシュリースカラーラ・ミシュラ (Śrīsu-khalāla Mīśra) を祖父とし、シュリーハリナーラーヤナ (Śrīharinārāyaṇa) を父親とする人物である⁽³⁾。

テキストのタイトルは、直訳するならば、『ガルダ・プラーナの精髓の抽出』といった意味である。このタイトルに含まれている『ガルダ・プラーナ』(*Garuḍapurāṇa*, 以下 GP) は、版本によって中身が大きく異なることが知られているが、『アグニ・プラーナ』(*Agnipurāṇa*) と同様、百科事典的な古譚として知られ、前篇 (pūrvakhaṇḍa) と後篇 (uttarakhaṇḍa. Pretakhaṇḍa, Pretakalpa と呼ばれる) に大きく分かれる⁽⁴⁾。

GPS は、そのうちの後篇の内容と非常に密接な関係があり、長さに関しても、その多くのヴァージョンとほぼ同じで、かつては両者が混同されたこともあったという⁽⁶⁾。しかしながら、GP の後篇との類似は多いものの、詩節によっては GP よりも、『バーガヴァタ・プラーナ』(*Bhāgavatapurāṇa*) や『バヴィシヨーッタラ・プラーナ』(*Bhaviṣyottapurāṇa*)、『ナーラダ・プラーナ』(*Nārada-purāṇa*) のものに一致する例が見られ、単なる要約ではないことが指摘されている⁽⁷⁾。また、内容的に仏教の餓鬼道との比較という点から重要であるだけでなく、現在でも

インドやネパールのヒンドゥー教徒の間で死者の葬送の際に朗読されることが報告されており、⁽⁸⁾「生きた」古典と呼ぶことができる。

GPSは16章から構成され、第1～7章は地獄について、第8～13章は死者儀礼について説明している。そして、第14章では天界、第15～16章ではヨーガや解脱についての説明がなされる。⁽⁹⁾本稿で和訳の対象とするのは、このうちの第1～3章である。

自業自得の法則を前提とした輪廻転生を認めるインドの宗教文献では、現在の苦しみを過去の悪業の結果として説明する記述がしばしば見られる。GPSにおいても、現代で言うところのハンセン病や、先天的な盲目、その他の大病をはじめとする様々な苦しみや、前世の悪業の印として述べられている。現代の価値観に照らして大きな問題があることは言うまでもなく、また、訳者個人としても、このような考え方は到底認められるものではない。

しかしながら、過去の思想を現代人の価値観から批判するのは容易く、古典に見られるそのような記述をタブー視して、なかったかのように振る舞うことにも大きな問題があるだろう。そのような思考停止に陥ることなく、人類の思想の変遷を知るための貴重な記録として生かしていただければ幸いである。また、翻訳の中には差別的な表現がしばしば見られるが、これらも原文を忠実に翻訳したものであって、訳者には差別を助長する意図のないことをご理解いただきたい。

GPSの版本は複数出版されているが、⁽¹⁰⁾現在、その多くは入手困難である。そのため、誤植も含めて誤りも多いが、入手することのできた以下の版本を底本とし、Gita Pressの版本を参考に適宜、訂正して読んだ。

【底本】

- ・ *The Garuḍa Purāṇa (Sāroddhāra) with English Translation*. The Sacred Books of the Hindus Vol. IX. Ed. Ernest Wood & S. V. Subrahmanyam. Allahabad: The Pāṇiṇi Office, 1911. (英訳を含む)

また、翻訳に際しては、上記の底本に含まれる英訳の他に、以下の2種類の翻訳（ドイツ語訳、ヒンディー語訳）を参照した。

【翻訳】

- ・ *Der Pretakalpa des Garuḍa-Purāṇa (Naumidhirāma's Sāroddhāra): Eine Darstellung des hinduistischen Totenkultes und Jenseitsglaubens.* Tr. Emil Abegg. Berlin und Leipzig: Vereinigung wissenschaftlicher Verleger, 1921. (ドイツ語訳)
- ・ *Garuḍapurāṇasāroddhāra.* 訳者不明. Gorakhpur: Gitapress, 2015. (ヒンディー語訳)

GPS を扱った近年の注目すべき研究としては、以下のものがある。

【研究】

- ・ *Preta, Pitr̥ und Piśāca: Rituelle und mythische Totenbilder im Pretakalpa des Garuḍapurāṇa, dem Garuḍapurāṇasāroddhāra und der Pretamañjarī.* Johanna Buß, 2006. (ハイデルベルク大学提出博士請求論文)
- ・ *Aspekte der Vorbereitung auf den Tod und des Sterbeprozesses: dargestellt anhand des Garuḍapurāṇasāroddhāra und des Garuḍapurāṇa (Pretakalpa).* Johanna Shakiri Grußmann, 2009. (ウィーン大学提出博士請求論文)

凡 例

- ・ 1つの詩節で内容が完結していない場合でも、可能な限り切って訳すようにした。
- ・ サンスクリット語文献に頻出する epithet を用いた多様な表現は、翻訳を読む際には文脈の理解を妨げることも多いため、ガルダの epithet 以外は、極力、代表的な名前（例えば、ヴィシュヌ、シヴァ等）で訳出するようにし、注に epithet の日本語訳と原語を記した。
- ・ 原文にない語を補う際には、〔 〕を使用した。

- ・指示代名詞等が指す語を補う際には、(=) を使用した。
- ・注には、先行する翻訳において解釈が大きく異なる点を中心に記した。また、本テキストを読むうえで最低限必要と思われる情報や優れた和訳のある『マヌ法典』などの関連箇所についても注記した。これらの情報に関しては、Abegg 1921 に負うところが大きい。その他の古譚や叙事詩などの関連箇所に関する詳しい情報については、Abegg 1921 を参照されたい。

和 訳

第 1 章⁽¹¹⁾

1・1 ^{ダルマ}法という堅固な根を張っており⁽¹²⁾、ヴェーダを幹とし、^{フラーナ}古譚という枝に満ちており、供犠を花とし、解脱を果实とする、⁽¹³⁾ヴィシユヌという木に栄光あれ。

1・2 ニミシャ⁽¹⁴⁾の地にあるナイミシャ〔の森〕で、天界を獲得するために、シヤウナカをはじめとする聖仙たちが 1,000 年続く祭式を行っていました。

1・3 ある日の朝、その聖者たちは聖火に供物を捧げました。そして、座っているスータに敬意を表すると、恭しく次のように尋ねました。

聖仙たちは尋ねました――

1・4 「あなたは幸福をもたらす神々の道について正しく話しました。これからは、恐怖をもたらすヤマの道について聞きたいと思います。

1・5 同様に、輪廻の苦しみ、その苦悩を滅ぼす手段⁽¹⁵⁾、現世と来世の苦悩についてありのままに話して下さい。」

スータは答えました――

1・6 「おお、お聞きなさい。進むのに非常に困難を伴うヤマの道についてお話ししたいと思います。それは高潔な者たちには楽をもたらし、罪人たちには苦をもたらします。

1・7 あなた方の疑惑を断ち切るために、ヴィナターの息子 (= ガルダ) が尋

ねた時に尊いヴィシュヌが話したのとまったく同様にお話ししましょう。

1・8 ある時、師である尊いヴィシュヌがヴァイクンタ天で心地よく座っていると、ヴィナターの息子が恭しく敬礼して尋ねました。

ガルダは尋ねました――

1・9 「あなたは私に多様な信愛の道について話しました。神よ、また同様に、信者たちの至上の帰趨について話しました。

1・10 これから、恐怖をもたらすヤマの道について聞きたいと思います。あなたに対する信愛から顔を背ける者たちが、他ならぬその道を進むと聞いています。

1・11 尊い方の名前は理解しやすく、舌も〔その名前に〕従います。⁽¹⁸⁾ それにもかかわらず、彼らは地獄へ赴くのです。⁽¹⁹⁾ 〔そのような〕人間の中でも最低の者たちは呪われてあれ。

1・12 尊い方よ、それゆえに、罪人たちが赴く帰趨について、そして、彼らがヤマの道の苦しみを得るありさまを私に話して下さい。」

吉祥なる尊い方は答えました――

1・13 「鳥の王よ、ヤマの道についてお話ししましょう。お聞きなさい。それを通して罪人たちが地獄へ赴き、聞く者たちにさえ恐怖をもたらすものを。

1・14 タールクシヤよ、⁽²⁰⁾ 悪事を好む者たち、憐れみと法^{ダルマ}を欠いている者たち、邪悪な人々と交際する者たち、正しい教えと善き人々との交際から顔を背ける者たち、

1・15 自惚れている者たち、頑固な者たち、財産ゆえの驕りと高慢に満ちた者たち、⁽²¹⁾ 阿修羅的な性質を備えている者たち、神的な資質を欠いている者たち、

1・16 様々な考えにより錯乱している者たち、⁽²²⁾ 迷妄の網によって覆われている者たち、欲望の対象の享受に執着している者たち。これらの者たちは不浄な地獄へ堕ちます。

1・17 〔正しい〕認識に努める人たちは最高の帰趨へ赴きます。罪を犯せばかりい人たちは苦しみながらヤマの責め苦に遭います。

- 1・18 この世の苦しみが罪人たちに生じるさまを、そして、彼らが死んだ後、責め苦しに遭うさまをお聞きなさい。
- 1・19 彼らは以前に獲得した通りに、善業、もしくは悪業〔の果報〕を享受します。すると、業により、その者に何らかの病が生じます。
- 1・20 強力な死〔神〕は、心と身体の病に苛まれながらも生きることを求めている人に、あたかも蛇のように忍び寄って来ます。
- 1・21 それでも世を厭うことなく、かつて自分が養った者たちに養われ、老いに飲み込まれて醜くなって、家の中で死に直面するのです。⁽²³⁾
- 1・22 無作法に置かれた物を番犬のように食べ、病に罹り、〔体内の〕火は弱くなり、少食で、ほとんど動かなくなります。⁽²⁴⁾
- 1・23 ヴァータにより眼球が飛び出し、カバにより脈管を塞がれ、咳と呼吸〔困難〕により疲弊し、喉がぜいぜいと鳴ります。⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾
- 1・24 嘆き悲しむ自分の親族に囲まれて横たわっており、死〔神〕の縄に捕らわれているため、話しかけられても答えることはありません。
- 1・25 このような状態で家族の扶養を心配し、感官も制御できず、親族が泣き叫ぶ中、激しい痛みによって意識を失って死んでいくのです。
- 1・26 タールクシヤよ、その最後の瞬間には全世界が一つになるという神的な幻影が生じ、彼は何も言おうと望みません。
- 1・27 諸感官が損われて意識を失うと、ヤマの使者たちが近付いて来て、^{プラーナ}⁽²⁷⁾ 氣息が出て行きます。
- 1・28 氣息が本来の場所を離れると、病人にとっての一瞬は劫のようになり、^{カルバ}⁽²⁸⁾ 100匹のサソリに刺された者の〔ような〕痛みが引き起こされます。
- 1・29 そして、彼は泡を吐き、口は唾液でいっぱいになります。罪人たちの氣息は下方の出入口を通して出て行きます。⁽²⁹⁾
- 1・30 その時、ヤマの恐ろしい使者が2人やって来ます。彼らは見るからに狂暴で、⁽³⁰⁾ 縄と棍棒を携え、裸で、⁽³¹⁾ 歯を軋らせています。
- 1・31 髪は逆立ち、カラスのように黒く、口元が歪んでおり、武器のような爪を持った使者を目にすると、彼は怯えた心で大小便を漏らします。

- 1・32 まさにその時、親指大の人は「ああ、ああ」と言って、自分の住処（=身体）を眺めながらヤマの使者によって身体から引きずり出されます。
- 1・33 そして、責め苦を受ける身体⁽³²⁾で覆われ、首のところを力まかせに縄⁽³³⁾で縛られて、長い道のりを連れて行かれます。それはあたかも王の召使たちが罪人を連れて行くかのようです。
- 1・34 このように彼が連れて行かれる間に、〔ヤマの〕使者たちは彼を脅し、地獄の凄まじい恐怖について何度も繰り返し語ります。
- 1・35 「邪悪な奴め、さっさと歩け。ヤマの住処へ行くんだ。今すぐお前をクンビーパーラカなどの地獄⁽³⁴⁾へ連れて行ってやる。」
- 1・36 その時、このような言葉と親族の泣き声を耳にして、大きな声で「ああ、ああ」と嘆き悲しみながらヤマの召使たちに打たれるのです。
- 1・37 彼らの脅しにより心を引き裂かれ、身震いし、道では犬たちに咬まれて、苦しみながら自分の悪行を思い出します。
- 1・38 飢えと渇きに悩まされ、太陽、森の火、熱風⁽³⁵⁾に焼かれ、背中を鞭で打たれて、〔歩く〕力がないにもかかわらず、砂が熱せられて休む場所も水もない道を苦しげに歩きます。
- 1・39 あちこちで疲弊して倒れ、失神しては再び起き上がり、さらにひどい道を通り、闇を抜けてヤマの住処へ連れて行かれるのです。⁽³⁶⁾
- 1・40 人は3ムフルタ⁽³⁷⁾、あるいは2ムフルタの間にそこへ連れて来られます。そして、〔ヤマの〕使者たちが地獄の恐ろしい責め苦を見せます。
- 1・41 1ムフルタ後にヤマと〔地獄の責め苦〕恐怖⁽³⁸⁾を目にすると、人はヤマの命令により、使者たちとともに空を飛んで慌てて引き返します。
- 1・42 戻って来ると、潜在印象の影響で身体を求めますが、ヤマの使者たちに縄で捕縛され、飢えと渇きに苦しめられて泣き叫びます。⁽³⁹⁾
- 1・43 彼は息子たちが捧げた団子と病気の時になされた供物を享受します。⁽⁴⁰⁾
タールクシヤよ、それでも罪深い異端論者は満足しません。⁽⁴¹⁾
- 1・44 供物、祖霊祭⁽⁴²⁾、両手にためた水は罪人たちのもとはとどまりません。⁽⁴³⁾
そのため、彼らは団子という供物を享受しても、飢えによって悩まされて

〔ヤマの道を〕進むのです。

- 1・45 彼らは団子という供物が^{フレータ}ないため、⁽⁴⁴⁾死霊の姿になります。そして、劫末まで、ひどくしみながら人のいない森をさまよいます。
- 1・46 享受されなければ、たとえ10億劫経ても業は消滅⁽⁴⁵⁾しません。また、責め苦を受けなければ、決して靈魂は人間になれません。
- 1・47 2度生まれる者⁽⁴⁶⁾よ、したがって、息子は10日間にわたって団子を捧げるべきです。鳥の中の最上者よ、それらは毎日、4つの部分に分けられます。
- 1・48 〔1番目と2番目の〕2つの部分は身体⁽⁴⁶⁾の五元素を養います。3番目〔の部分〕はヤマの使者たちのものであり、彼は4番目〔の部分〕を食べます。
- 1・49 9日間にわたって死霊は団子を受け取り、⁽⁴⁷⁾靈魂に身体が生じます。そして、10日目になると、力を手に入れます。
- 1・50 空を行く者よ、〔古い〕身体が火葬されると、団子によって一腕尺大の〔新しい〕身体が再生します。人はこの身体により、道中で善悪〔の果報〕を享受します。
- 1・51 1日目の団子によって頭が生じます。2日目の〔団子〕によって首と肩が、3日目の〔団子〕によって心臓が生じます。
- 1・52 4日目の〔団子〕によって背中が、5日目の〔団子〕によって臍が生じます。6日目の〔団子〕によって臀部と陰部が、7日目の〔団子〕によって大腿部が生じます。
- 1・53 同様に、〔8日目と9日目の〕2日間で膝と下腿が、10日目に飢えと渴きが生じます。
- 1・54 団子から生じる身体に入ると、死霊は飢えにとらわれ、渴きに悩まされて、11日目と12日目の2日間を⁽⁴⁸⁾過ごします。
- 1・55 13日目になると死霊はヤマの召使たちに拘束され、あたかも捕らわれた猿のようにただ1人でその道を歩きます。
- 1・56 ヤマの道の広がり⁽⁴⁹⁾は、ヴァイタラニー川を除いても、距離にして⁽⁵⁰⁾86,000 ヨーjanaあります。空を行く者よ。

1・57 死霊は日々、昼も夜も 247 ヨージャナ進みます。

1・58 罪深い人は道中、次のような 16 の町を順に通過してヤマの住処へ行きます。⁽⁵¹⁾

1・59 [すなわち、]⁽⁵²⁾ サウミヤ、サウリプラ、ナゲンドラバヴァナ、ガンダ
ルヴァ、シャイラーガマ、クラウンチャ、クルーラプラ、ヴィチトラバヴァ
ナ、バフヴァーパダ、ドゥフカダ、ナーナー克蘭ダプラ、スタプタバヴァ
ナ、ラウドラ、パヨーヴァルシャナ、シーターディヤ、バフビーティです。
法⁽⁵³⁾の住処であるヤマの町の前には〔以上の町があります〕。

1・60 ヤマの使者の縄⁽⁵⁴⁾によって捕らわれた罪人は道中で「ああ、ああ」と泣
き叫びながら、自分の家 (= 身体) を捨ててヤマの町へ行きます。」

吉祥なる『ガルダ・プラーナの精髓抽出』の「罪人たちの現世と来世における
苦しみの説明」という名の第 1 章終わり。

第 2 章

ガルダは尋ねました——

2・1 「苦しみをもたらすヤマの世界へ至る道はどのようなものですか。ヴィ
シュヌよ、⁽⁵⁵⁾罪人たちがそこへ行くありさまを私に話して下さい。」

吉祥なる尊い方は答えました——

2・2 「大きな苦しみをもたらすヤマの道についてあなたにお話ししましょう。
たとえ私の信者であっても、それを聞いたら、あなたは震え上がるでしょう。

2・3 そこには人が休息できるような木陰はありません。その道には生命をつ
なぐための食べ物などありません。

2・4 激しく喉が渇いた者が飲めるような水もどこにもありません。⁽⁵⁶⁾ あたかも
宇宙の帰滅の時のように、12 の太陽が照りつけます、空を行く者よ。

2・5 その道において、罪人は冷たい風に苦しめられて進みます。そして、あ
る場所では棘で貫かれ、ある場所では猛毒の蛇に咬まれます。

2・6 ある場所では罪人は⁽⁵⁷⁾ 獐猛なライオン、虎、犬に食われます。また、ある

場所ではサソリに刺され、ある場所では火に焼かれます。

- 2・7 さらに、ある場所には剣のような葉をつけた〔木々の〕非常に恐ろしい大きな森⁽⁵⁸⁾があり、その縦横は2,000 ヨージャナと言われています。
- 2・8 そこにはカラス、梟、鷹、鷲、蜂、虻が群がり、森の火が燃え盛っており、その葉によってずたずたにされてしまいます。
- 2・9 ある場所では隠れた井戸に落ち、ある場所では険しい山から落ちます。また、ある場所では剃刀の刃や矢先の上を進みます。
- 2・10 ある場所では恐ろしい濃い闇⁽⁵⁹⁾の中でつまずいて水にはまります。ある場所では蛭の群がる沼に、ある場所では熱せられた泥濘にはまります。
- 2・11 ある場所では熱せられた砂が撒き散らされた場所、熱で溶けた銅に満ちた場所を〔進みます〕。また、ある場所では石炭の堆積の中を、ある場所では多くの煙で満たされた場所を〔進みます〕。
- 2・12 ある場所では石炭の雨や雷を伴う岩石の雨が降り、ある場所では血の雨、武器の雨、熱湯の雨が降ります。
- 2・13 ある場所では腐食性の泥の雨⁽⁶⁰⁾が降ったり、深い地割れがあったりします。また、ある場所では丘を登ったり、洞窟に入ったりしなければなりません。
- 2・14 その道のある場所には濃い闇があり、登るのが困難な岩山があります。また、ある場所には膿、血液、排泄物に満ちた湖があります。
- 2・15 道の真ん中にはひどく恐ろしいヴァイタラニー川⁽⁶¹⁾が流れています。それは見るだけでも苦しみをもたらし、その噂ですら恐怖を引き起こします。
- 2・16 〔その川は、〕幅は100 ヨージャナにも及び、膿と血が流れ、岸には骨が堆積し、渡り難しく、肉と血の泥濘⁽⁶²⁾を含んでいます。
- 2・17 また、底なしで、罪人たちには渡り難しく、毛髪のような水草⁽⁶³⁾により進むのが困難であり、巨大なワニ⁽⁶⁴⁾が一面を覆い、何百もの恐ろしい鳥たちが群がっています。
- 2・18 タールクシヤよ、罪人がやって来るのを目にすると、炎と煙に満ちたその川はあたかも鍋の中の液状バターのように煮えたぎります。⁽⁶⁵⁾

- 2・19 また、口の中に針を持つ恐ろしい蠕虫に満ち満ちており、ダイヤモンドのように硬い嘴を持つ大きな鷺やカラスが群がっています。⁽⁶⁶⁾
- 2・20 他にも、ネズミイルカ、ワニ、⁽⁶⁷⁾ 蛭、魚、亀、その他の肉食の水棲動物に満ちています。
- 2・21 その川に落ちた重罪人たちは「ああ、兄弟よ」「息子よ」「父よ」と泣き叫び、何度も繰り返して嘆き悲しみます。
- 2・22 飢えて、渴きを覚えた罪人たちは血を飲むと言います。その川には血に塗れた多くの泡が流れています。⁽⁶⁸⁾
- 2・23 極めて恐ろしく、轟音を立てており、直視し難く、恐怖をもたらし、それを見ただけで罪人たちは失神してしまいます。
- 2・24 多くのサソリが群がり、黒蛇たちが住んでおり、その川の真ん中に落ちた者たちを助ける者は誰もいません。
- 2・25 百千の渦により、罪人たちは地底界へ行きます。⁽⁶⁹⁾ そして、彼らは一瞬だけ地底界に滞在して、瞬時に上昇します。
- 2・26 空を行く者よ、その川は罪人たちが落ちるためだけに作られたものであり、その向こう岸を見ることもできず、渡り難く、多くの苦しみをもたらします。
- 2・27 このように、多様な苦悩があり、ひどい苦しみをもたらすヤマの道を、罪人たちは苦しみ、泣き叫び、嘆き悲しみながら進みます。
- 2・28 ある罪人たちは縄で拘束され、鍵棒で引き摺られ、武器の先端で背後から突き刺されて連れて行かれます。
- 2・29 他の者たちは鼻先に付けた縄で引っ張られたり、耳に付けた縄で〔引っ張られたりします〕。他の者たちは死〔神〕の縄で引っ張られたり、カラスに啄ばまれたりします。
- 2・30 ある者たちは首、腕、足、背中を鎖で縛られ、多くの鉄の重荷を担って道を進みます。⁽⁷⁰⁾
- 2・31 非常に恐ろしいヤマの使者たちにハンマーで打たれて、彼らは口から血を吐いては、再びそれを飲み込みます。

- 2・32 人々は自分の行いを後悔し、消耗します。そして、ひどい苦しみを抱えてヤマの屋敷へ行きます。
- 2・33 また同様に、その愚者は道を歩きながら「息子よ」「孫よ」と呼び掛け、「ああ」とたえず嘆き悲しんでは後悔するのです。
- 2・34 「人間としての生まれは大きな功德によって得られます⁽⁷¹⁾。それを得ても義務を果たさず、いったい私はどんなことをしたというのでしょうか。
- 2・35 私は布施をしたこともなく、⁽⁷²⁾火に供物をくべたこともありません。苦行を行じたこともなければ、⁽⁷³⁾神々を崇拜したこともありません。規定に従って聖地を巡礼したこともありません。⁽⁷⁴⁾ 靈魂よ、⁽⁷⁵⁾どんなことであれ、あなたが行ったことを償いなさい。⁽⁷⁶⁾
- 2・36 バラモンの集まりを敬ったこともなく、⁽⁷⁷⁾ガンジス川を訪れたこともありません。善き人々に奉仕したこともなければ、⁽⁷⁸⁾決して人助けをしたこともありません。靈魂よ、どんなことであれ、あなたが行ったことを償いなさい。
- 2・37 人間のためにも、獣や鳥のためにも、水のない場所に貯水池を作ったことがありません。牛やバラモンを支えるために僅かなこともしたことがありません。靈魂よ、どんなことであれ、あなたが行ったことを償いなさい。
- 2・38 毎日の布施や日々の牛の餌やりもしたことがなく、ヴェーダや論書の趣意を語る言葉の権威を認めたこともありません。古譚に耳を傾けたこともなければ、賢者を敬ったこともありません。⁽⁷⁹⁾ 靈魂よ、どんなことであれ、あなたが行ったことを償いなさい。
- 2・39 私は夫の有益な助言に従ったこともなければ、夫に対する貞節を守ったこともいまだかつてありません。また、いかなる時も年長者に⁽⁸⁰⁾相応しい敬意を払ったことがありません。靈魂よ、どんなことであれ、あなたが行ったことを償いなさい。
- 2・40 正しい心で夫に奉仕したこともなければ、夫が死んだ時に火に飛び込んだこともありません。また、寡婦になっても苦行を行じたことがありません。靈魂よ、どんなことであれ、あなたが行ったことを償いなさい。
- 2・41 私は毎月の断食や厳格なチャンドラーヤナの誓戒によって身を養⁽⁸¹⁾

たこともありません。⁽⁸²⁾以前になした悪行により、多くの苦しみの器である女の身体を獲得しました。

2・42 このように何度も嘆き悲しみ、前世の行いを思い出して、「どうすれば私は〔再び〕人間になれるのでしょうか」と泣き叫びながら進むのです。⁽⁸³⁾

2・43 17日間はたった1人で、風のような勢いで進みます。⁽⁸⁴⁾タールクシヤよ、18日目になると、死霊はサウミヤブラにたどり着きます。⁽⁸⁵⁾

2・44 美しく、優れたその町には死霊たちの大きな群れがいます。そこにはプシュババドラー川⁽⁸⁶⁾が流れ、見た目の美しいニヤグローダ樹⁽⁸⁷⁾が生えています。

2・45 その町で、彼はヤマの召使たちにより休息をとられます。⁽⁸⁸⁾そこでは、苦しみながら妻や息子などとの幸福を思い出します。

2・46 彼が財産や召使といったあらゆるものについて嘆くと、そこにいる死霊たちと〔ヤマの〕召使たちが次のように言います。

2・47 「どこに財産があり、どこに息子や妻がいるというのだ。また、どこに友人や親族がいるというのだ。自分の行為によって得られたものを享受するだけだ。愚か者よ、ずっと道を進め。

2・48 知ってのとおり、糧食の力は旅人の力だ。来世へ旅する者よ、しかし、お前は糧食の用意をしないし、売り買いのできない道を通って行かねばならないことが決まっている。

2・49 死すべき者よ、子どもでも知っているこの道のことを、お前はまったく聞いたことがないのか。バラモンからも古譚に含まれる言葉を聞いたことがないのか。」

2・50 〔ヤマの〕使者たちにこのように言われ、ハンマーで打たれながら倒れては起き上がって走り、縄により力づくで引っ張られます。

2・51 ここで息子や孫たちが愛情や同情ゆえに捧げた月々の団子⁽⁸⁹⁾を食べると、彼はサウリブラへ行きます。⁽⁹⁰⁾

2・52 その町には死神の姿をしたジャンガマという名の王がいます。その王を目にすると、彼は恐怖に怯え、休息をとろうと考えます。

2・53 その町にやって来て、三半月^{バクシヤ}の終わりに捧げられた水と食べ物をとる

- ⁽⁹¹⁾と、彼はその町を通過して行きます。
- 2・54 その後、死霊は急いでナゲンドラバヴァナへ行きます。⁽⁹²⁾そして、その町の恐ろしい森を目にして、苦しみ、泣き叫びます。
- 2・55 無慈悲な〔ヤマの使者たち〕に引っ張られて、彼は何度も繰り返し泣き叫びます。そして、2か月が過ぎると、よろめきながらその町にたどり着きます。⁽⁹³⁾
- 2・56 ここで親族によって捧げられた団子、水、⁽⁹⁴⁾衣を享受した後、再び〔ヤマの〕召使たちに縄で引っ張られて、先へと連れて行かれます。
- 2・57 第3の月になると、⁽⁹⁵⁾ガンダルヴァパッタナにたどり着き、⁽⁹⁶⁾そこで第3の月の団子を享受してから進みます。
- 2・58 そして、第4の月には⁽⁹⁷⁾シャイラーガマという町にたどり着きます。そこでは、死霊の上に大量の岩石が降ってきます。
- 2・59 第4の月の団子を食べると、彼はいくらか幸せになります。そして、第5の月に、⁽⁹⁸⁾死霊はクラウンチャの町にやって来ます。
- 2・60 クラウンチャの町にいる時に、死霊は手で捧げられた第5の月の団子を⁽⁹⁹⁾食べます。食べた後は、⁽¹⁰⁰⁾クルーラの町へ行きます。
- 2・61 5か月半経つと、第6の月が終わる前の⁽¹⁰¹⁾供物を受け取ります。彼はそこにとどまっている時に、捧げられた団子と水瓶〔の水〕に満足します。
- 2・62 そして、半ムフルタの間だけ休息すると、非常に苦しみ、震えながらヤマの召使たちに脅されてその町を離れます。
- 2・63 次に、彼は⁽¹⁰²⁾チトラバヴァナへ行きます。そこではヤマの弟のヴィチトラという名の王が王国を治めています。
- 2・64 体の大きな王を目にすると、彼は怯えて逃げ出します。すると、漁師たちが目の前にやって来て、次のように言います。
- 2・65 「広大なヴァイタラニー川を渡ろうと望むあなたに小舟を持って来ました。⁽¹⁰³⁾もしあなたが相応の功德を積んでいればの話ではありますが。
- 2・66 真実を観察した聖者たちは布施のことを「ヴィタラナ」と呼んでいます。そして、それによって渡られるがゆえに、この川は「ヴァイタラニー」

と呼ばれているのです。

- 2・67 もしあなたが〔バラモンに〕牛を布施していたならば、小舟が近付いて来ます。そうでなければ、近付いて来ません。」彼らの言葉を耳にすると、彼は「ああ、運命よ」と声を上げます。
- 2・68 彼を見るとその川は煮えたぎり、⁽¹⁰⁵⁾それを見て彼は泣き叫びます。そして、布施をしなかった罪人はその川に沈みます。
- 2・69 すると、虚空にいる〔ヤマの〕使者たちが彼の口に棘を入れて、向こう岸に引き上げます。それはあたかも釣り針で魚を引き上げるかのようです。
- 2・70 そこで第6の月の団子を食べた後、彼は進みます。彼は飢えにひどく悩まされ、嘆き悲しみながら道を行きます。
- 2・71 第7の月になると、バフヴァーパダという町に⁽¹⁰⁶⁾たどり着きます。そして、そこで第7の月に息子たちが捧げたものを享受します。
- 2・72 その町を通過した後は、ドゥフカダという町へ⁽¹⁰⁷⁾行きます。空を進みながら、彼は大きな苦しみを被ります、空を行く者の主よ。
- 2・73 第8の月に捧げられた団子を食べた後、彼は進みます。そして、第9の月が満ちると、ナーナークランダの町に⁽¹⁰⁸⁾たどり着きます。
- 2・74 泣き叫んでいる非常に痛ましいナーナークランダの人々を目にすると、⁽¹⁰⁹⁾彼自身も心が虚ろになり、苦しんで泣き叫びます。
- 2・75 その町を離れた後、死霊はヤマの使者たちに脅されながら、第10の月に辛うじてスタプタバヴァナに⁽¹¹⁰⁾たどり着きます。
- 2・76 そこで捧げ物の団子と水を享受しても、安心することはありません。そして、第11の月が満ちると、彼はラウドラという町へ⁽¹¹¹⁾行きます。
- 2・77 そこでは息子たちが捧げた第11の月の〔団子〕を享受し、11か月と半月が経つと、パヨーヴァルシャに⁽¹¹²⁾たどり着きます。
- 2・78 そこでは死霊たちに苦しみをもたらす雲が雨を降らせません。そして、そこで彼は苦しみながら、1年が満ちる前の祖霊祭を享受します。
- 2・79 そして、1年が満ちると、彼はシーターデイヤという町に⁽¹¹³⁾たどり着きます。⁽¹¹⁴⁾そこでは雪の100倍という厳しい寒さに苦しみます。

- 2・80 寒さに悩まされ、飢えて、彼は十方を見渡して〔言います〕、「私の苦しみを取り除いてくれる親族は誰かいないでしょうか。」
- 2・81 ここで〔ヤマの〕召使たちが言います。「お前にそんな功德があるものか。」そして、1年目の団子を食べると、彼は再び元気を取り戻します。
- 2・82 そして、その年の終わりにヤマの住処が近くなると、バフビーティ⁽¹¹⁵⁾という町へ行⁽¹¹⁶⁾って、1腕尺大の〔身体〕を捨てます。
- 2・83 親指大⁽¹¹⁷⁾の風は空を飛び、業〔の果報〕を享受するために責め苦を受け⁽¹¹⁸⁾る身体を獲得した後、ヤマの召使たちとともに進みます。
- 2・84 カシヤパの息子よ、死霊に対する捧げものをしない者たちはこのように強固な束縛に捕らわれて、苦勞して進みます。
- 2・85 空を行く者よ、ヤマの町には4つの門があります。それらのうち、南の門を通る道⁽¹¹⁹⁾があなたに説かれていま⁽¹²⁰⁾す。
- 2・86 以上、飢え、渇き、疲勞に苦しめられた者たちがこの非常に恐ろしい道を進むありさまをお話ししました。あなたはさらに何が聞きたいですか。」

吉祥なる『ガルダ・プラーナの精髓抽出』の「ヤマの道の説明」という名の第2章終わり。

第3章

ガルダは尋ねました――

- 3・1 「ヤマの道を通してヤマの住処へ行⁽¹²¹⁾った後、罪人はどのような責め苦を享受するのですか。ヴィシュヌよ、私にそれを話して下さい。」

吉祥なる尊い方は答えました――

- 3・2 「初めから終わりまでお話ししましょう。ヴィナターの息子よ、お聞きなさい⁽¹²²⁾。地獄について話すだけでも、あなたは震え上がるでしょう。
- 3・3 カシヤパの息子よ、バフビーティの町から先へ44 ヨー⁽¹²³⁾ジヤナのところに、ヤマの大きな町⁽¹²⁴⁾があります。
- 3・4 「ああ、ああ」という声に満ち溢れたその町を目にすると、罪深い者は

- 泣き叫びます。そして、ヤマの町の住民たちが彼の泣き叫ぶ声を耳にします。
- 3・5 すると、彼らは全員で門衛のところへ行って報告します。門衛のダルマ⁽¹²⁵⁾ドヴァジャはいつもそこにいるのです。
- 3・6 ダルマドヴァジャはチトラグプタのところへ行って、その者の善業と悪業について報告します。その後、チトラグプタもヤマ⁽¹²⁷⁾にそれを報告します。
- 3・7 タールクシヤよ、異端論者たちはいつも大罪を犯してばかりいますが、ヤマは彼ら全員のことをあるがままに正しく知っています。
- 3・8 それでもヤマは彼らの罪についてチトラグプタに尋ねるのです。チトラグプタもすべてを知っていますが、シュラヴァナに尋ねます。
- 3・9 シュラヴァナたちはブラフマンの息子で、天界、地上界、地底界に住んでいます。彼らは遠くのもの聞き分ける力と遠くのものを見る目を備えています。
- 3・10 彼らの妻も同様の性質を備えており、別個にシュラヴァニーと呼ばれています。彼女たちは女たちのすべての行いを正しく知っています。
- 3・11 人々が秘密にであれ公にであれ言ったことや行ったことのすべてを、シュラヴァナ、シュラヴァニーたちはチトラグプタに報告します。
- 3・12 それらのヤマの密使たちは心、言葉、身体から生じる人間たちの善悪の業のすべてを正しく知っています。
- 3・13 人間と神を司る彼らには以上のような力があります。シュラヴァナたちは人間たちの行為を〔ヤマに〕報告しますが、真実を語ります。
- 3・14 警戒、布施、真実の言葉により彼らを満足させる人に対して、彼らは親切であり、天界や解脱をもたらします。
- 3・15 それらの真実を語る者たちが罪人たちの悪業を知ると、ヤマの前では「苦しみをもたらす者」と呼ばれるようになります。
- 3・16 太陽、月、風、火、虚空、地、水、心、ヤマ、昼、夜、2つの結合時、^{サンディヤー}ダルマ法。これらは人々の行いを知っています。
- 3・17 その場所で、ヤマ、チトラグプタ、シュラヴァナ、太陽などは身体に存する善業と悪業を完全に見通します。

- 3・18 このように罪深い者たちの大罪を確定すると、ヤマは彼らを召喚して、自らの非常に恐ろしい姿を示します。
- 3・19 そして、その非常に罪深い者たちは、杖を手に持ち、身体は大きく、水牛の上に乗ったヤマの恐ろしい姿を目にします。
- 3・20 [ヤマは宇宙の] 帰滅の時の雲のような唸り声を上げ、油煙の山のようであり、稲妻のように輝く武器によって恐ろしく、32本の腕を備えています。
- 3・21 また、3 ヨーヅアナの広がり⁽¹³⁴⁾を持ち、目は池のようであり、その口は牙によって恐ろしく、目は赤く、長い鼻をしています。
- 3・22 死や熱などを従えたチトラグプタも恐ろしいものです。彼の近くではヤマに似た使者たちが全員で唸り声を上げています。
- 3・23 チトラグプタを目にすると、邪悪な者は恐怖に怯えて「ああ、ああ」と叫びます。布施をしたことのない罪人は震え上がり、再び泣き叫びます。
- 3・24 その後、ヤマの命令により、泣き叫び、自らの行いを嘆き悲しんでいる罪人たち全員にチトラグプタが話しかけます。
- 3・25 「おお、おお、行いの悪い罪人たちよ、自我意識に汚された者たちよ、なぜお前たちは分別もなしに罪を犯したのだ。
- 3・26 愚かな人々よ、欲望や怒りなどにより、また、罪人たちとの交際により⁽¹³⁵⁾罪が生じる。苦しみをもたらすそのような罪をなぜ犯したのだ。」
- 3・27 かつてお前たちは罪を犯しては大いに喜んでいたのでから、責め苦を享受しなければならない。今、なぜ顔を背けているのだ。
- 3・28 お前たちは非常に多くの罪を犯したが、それらの罪が苦しみの原因であることに偽りはない。
- 3・29 ヤマは愚者と賢者、貧者と富者、強者と弱者に対して平等であると言われている。」
- 3・30 チトラグプタの以上のような言葉を聞くと、その罪人たちは自分の行為を嘆き悲しみ、黙ってじっとしています。
- 3・31 彼らが泥棒のようにじっと立っているのを目にすると、ヤマは犯した

罪に相応しい罰⁽¹³⁶⁾を命じます。

- 3・32 すると、その無慈悲な使者たちは彼らを打って言います。「罪人よ、非常に恐ろしく極めて恐怖すべき地獄へ行け。」
- 3・33 ヤマの命令に従うプラチャンダ、チャンダガをはじめとする使者たちは1本の縄で彼らを縛った後、地獄へ連れて行きます。
- 3・34 そこには燃え上がる火のように輝く1本の大木があります。その木は5ヨーjanaの広がりを持ち、1ヨーjanaの高さがあります。
- 3・35 頭を下にしてその木に鎖で吊るした後、ヤマの使者たちは彼らを打ちます。彼らはそこで焼かれて泣き叫びますが、助けてくれる者はいません。
- 3・36 そのシャルマリー樹⁽¹³⁷⁾には多くの罪人たちが吊るされています。彼らは飢えと渇きによって疲れ果て、ヤマの使者たちに打たれます。
- 3・37 非常に罪深く寄り添わない彼らは合掌して、その〔ヤマの〕使者たちに「おお、私の罪を許して下さい」と嘆願します。
- 3・38 彼らは〔ヤマの〕使者たちに鉄製の棒、ハンマー、投げ槍、槍、戦棍、すりこぎで何度も繰り返しひどく打たれます。
- 3・39 打たれることにより、彼らは動かなくなり、失神します。そして、動かなくなった者たちを目にすると、〔ヤマの〕召使たちは次のように言います。
- 3・40 「おお、おお、行いの悪い罪人たちよ、なぜ悪事を働いたのだ。容易に手に入るというのに、お前たちは水や食べ物ですら捧げたことがない。
- 3・41 お前は〔日常の祖霊祭において〕半口分の食べ物さえ捧げたことがなく、犬やカラスに対する捧げ物⁽¹³⁹⁾をしたこともない⁽¹⁴⁰⁾。また、客人に敬意を表したこともなければ、祖霊を満足させたこともない。
- 3・42 ヤマヤチトラグプタに対する至上の瞑想を行ったこともなければ、責め苦をなくすことのできる、両者のマントラ⁽¹⁴¹⁾を唱えたこともない。
- 3・43 聖地巡礼もまったく行ったことがなく、神々を崇拜したこともない。また、家住期⁽¹⁴²⁾にありながら、〔客人に対して〕「さあ、どうぞ」という声を掛けたこともない。

- 3・44 さらに、善き人々に奉仕したこともない。自分の悪業の果報を享受し⁽¹⁴³⁾。お前がひどく打たれるのは、法を欠いていたからだ。^{ダルマ}
- 3・45 尊い自在神のヴィシュヌは罪を許すが、俺たちはヤマの命令に従って罪人たちに罰を与える。」
- 3・46 このように言うと、〔ヤマの〕使者たちは容赦なく彼らを打ちます。打たれることにより、彼らは燃え上がる炭のように倒れます。
- 3・47 倒れることにより、彼の手足は葉で切り裂かれます。すると、倒れた彼らに犬が喰らいつき、彼らは泣き叫びます。
- 3・48 そして、泣き叫んでいる彼らの口を〔ヤマの〕使者たちが塵で満たし、様々な縄で縛り上げた後、ある者たちをハンマーで打ちます。
- 3・49 ある罪人たちは木片のように鋸で真っ二つに切られます。他の者たちは地面に放り投げられ、斧でバラバラにされます。⁽¹⁴⁵⁾
- 3・50 ある者たちは穴に半分埋められて、矢で頭を射抜かれます。⁽¹⁴⁶⁾ 他の者たちは機械の真ん中に固定されて、砂糖黍の茎のように圧搾されます。
- 3・51 ある者たちは炭で燃え上がっている松明に完全に包み込まれて、⁽¹⁴⁷⁾ 鉦石の塊のように溶かされます。⁽¹⁴⁸⁾
- 3・52 ある者たちは煮えたぎった液状バターの中に、他の者たちはゴマ油の中にとるように、あちらこちらに投げ込まれます。それはあたかも鍋に放り込まれた団子のようにです。
- 3・53 ある者たちは路上の興奮した象王の前に放り投げられ、ある者たちは両手両足を縛られて逆さ吊りにされます。
- 3・54 ある者たちは井戸に投げ込まれ、ある者たちは山から投げ落とされます。他の者たちは虫だらけの穴に沈められて、虫たちに苦しめられます。
- 3・55 さらに、ダイヤモンドのように硬い嘴を持つ大きなカラスや肉を求め⁽¹⁴⁹⁾る鷲により、嘴で頭部、目、顔を食いちぎられたりします。⁽¹⁵⁰⁾
- 3・56 他の者たちは負債〔の返還〕を求めて〔次のように言います〕。「私の財産をどうか返して下さい。ヤマの世界であなたが私の財産を享受しているのを見たのです。」

- 3・57 このように罪人たちが地獄で口論している間に、〔ヤマの〕使者たちはやっそこ鉢で彼らの肉片を切り取って与えます。
- 3・58 このように彼らを打った後、〔ヤマの〕使者たちはヤマの命令に従って引っ張って行き、ターミスラをはじめとする恐ろしい地獄に放り投げます。
- 3・59 その場所の木の近くには苦しみに満ちた地獄があります。それらの地獄における大きな苦しみは言葉で表現することができません。
- 3・60 空を行く者よ、840⁽¹⁵²⁾万の地獄がありますが、それらの中でも最も恐ろしい主要なものは次の21種類⁽¹⁵³⁾です。
- 3・61 〔すなわち、〕ターミスラ、ローハシャンク、マハーラウラヴァ、シャルマリー⁽¹⁵⁴⁾、ラウラヴァ、クドマラ、カーラストラカ、プーティムリツティカ、
- 3・62 サンガータ、ローヒトダ、サヴィシヤ、サンプラターパナ、マハーニラヤ、カーコーラ、サンジーヴァナ、マハーパタ、
- 3・63 アヴィーチ、アンダターミスラ、クンビーパーカ、サンプラターパナ、タパナという21種類です。
- 3・64 それらはすべて様々な苦しみや病に満ちており、様々な区別に従って構成されています。また、そこには様々な悪業の果報⁽¹⁵⁵⁾があり、〔ヤマの〕召使がたくさん住んでいます。
- 3・65 ^{ダルマ}法を欠き、愚かで、非常に罪深い者たちは、これらの地獄に落ちます。そして、そこで、劫末までそれぞれの地獄の責め苦を享受します。
- 3・66 男であれ女であれ、密通によって引き起こされたターミスラ、アンダターミスラ、ラウラヴァをはじめとする〔地獄の〕責め苦を享受するのです。
- 3・67 このように、家族を養っている者や私腹を肥やしている者が現世でそれらを捨てると、死後に相応の果報を享受します。
- 3・68 生き物を傷付けることで養われた自分の身体を捨てた後、彼は幸福以外のものを旅の糧として1人きりで闇の中に落ちます。
- 3・69 地獄において、人は家族を養うために運命により生じた汚れ〔の果報〕⁽¹⁵⁸⁾を享受します。それはあたかも財産を奪われた病人のようなもの⁽¹⁵⁹⁾です。

3・70 ただ^{アダルマ}非法によってのみ家族を養おうと求めた者は、闇の最果ての場所であるアンダターミスラへ赴きます。

3・71 人間界の下方で以上のような責め苦などを順に享受した後、清浄になると再びここにやってくるのです。⁽¹⁶⁰⁾

吉祥なる『ガルダ・プラーナの精髓抽出』の「ヤマの責め苦の説明」という名の第3章終わり。

(未完)

【略号表】

- CS *Carakasamhitā*. Ed. Yādavaśarman. Kāśī Saṃskṛta Granthamālā 228. Vārāṇasī: Caukhambhā Saṃskṛta Saṃsthāna, 2001.
- VSN *Viṣṇusahasranāma with the Bhāṣya of Śrī Śaṅkarācārya*. Ed. Ananthakrishna Sastry. The Adyar Library General Series 8. Madras: The Adyar Library and Research Centre, 1980.

【参考文献】

定方 晟

2011 『インド宇宙論大全』, 春秋社.

辻 直四郎

1970 『リグ・ヴェーダ讃歌』, 岩波文庫.

矢野 道雄

1988 『インド医学概論—チャラカ・サンヒター』(科学の名著第Ⅱ期1), 朝日出版社.

山下 勤

2006 「インド伝統医学書『チャラカ・サンヒター』における病理論—『チャラカ・サンヒター』第二篇第一章第一〜十五節訳解」, 『日本医史学雑誌』第52巻第3号, pp.395-423.

渡瀬 信之

2013 『マヌ法典』(東洋文庫 842), 平凡社.

Abegg, Emil

1921 *Der Pretakalpa des Garuḍa-Purāṇa (Naunidhirāma's Sāroddhāra): Eine Darstellung des hinduistischen Totenkultes und Jenseitsglaubens.* Berlin und Leipzig: Vereinigung wissenschaftlicher Verleger.

Buß, Johanna

2006 *Preta, Pitṛ und Piśāca: Rituelle und mystische Totenbilder im Pretakalpa des Garuḍapurāṇa, dem Garuḍapurāṇasāroddhāra und der Pretamañjarī.* (ハイデルベルク大学提出博士請求論文)

Grußmann, Johanna Shakiri

2009 *Aspekte der Vorbereitung auf den Tod und des Sterbeprozesses: dargestellt anhand des Garuḍapurāṇasāroddhāra und des Garuḍapurāṇa (Pretakalpa).* (ウィーン大学提出博士請求論文)

Rocher, Ludo

1986 *The Purāṇas. A History of Indian Literature Vol.II Fasc.3.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Wood, Ernest & Subrahmanyam, S. V.

1911 *The Garuḍa Purāṇa (Sāroddhāra) with English Translation.* The Sacred Books of the Hindus Vol. IX. Allahabad: The Pāṇiṇi Office.

(本研究は JSPS 科研費 19K12953 の助成を受けたものです)

- (1) 以下の内容は、主として Rocher 1986, Abegg 1921 にもとづく。
- (2) Abegg 1921, p.27, n.4 によれば、現在のジャイプルの北北西 140km のところにあるタフシール (インドの行政、および徴税上の区分のひとつで、州、県に次ぐもの) の首都 Jhuñjhunu に相当するという。
- (3) āsīd vaktā purāṇasya śrīśārdūlamahīpateḥ/ jhuñjhuñunagarasyāpi miśraḥ śrīsukhalālājī// tasya śrīharinārāyaṇātmajas tatsutena tu/ mayā naunidhirāmeṇa kṛto 'yaṃ sārasaṃgrahaḥ// テキストは、Buß 2006, p.34 による。
- (4) uttarakhaṇḍa の各章に関する詳細は、Abegg 1921, pp.11-27 を参照。
- (5) Abegg 1921, p.29 によれば、GPS は 16 章 1,275 詩節、GP の後篇は 35 章 1,391 詩節から成る。
- (6) 1862 年に GP の Pretakalpa としてボンベイで出版された版本が、実際には GPS であったことが Weber によって指摘された。Rocher 1986, p.177 を参照。
- (7) Abegg 1921, p.30 を参照。

- (8) Buß 2006, pp.34-35 を参照。
- (9) GPS 各章の詳細なシノプシスは、Grußmann 2009, p.11 以下を参照。
- (10) これまでに出版されている GPS の版本や翻訳については、Rocher 1986, p.177, n.203; Grußmann 2009, Appendix 2 を参照。
- (11) 底本では、冒頭に *śrīgaṇeśāya namaḥ* (尊いガネーシャに敬礼) という文言が見られるが、これは写本の筆写者などの手になるものであろう。
- (12) Abegg 1921 は「その根は堅固に法に根付いている (dessen Wurzeln fest im Dharma haften)」と解するが、従わなかった。
- (13) マドゥを滅ぼす者 (*madhusūdana*)。マドゥはアスラの名前であり、ヴィシュヌの 1,000 の異名を列挙した *Viṣṇuhasranāma* (以下、VSN) では、73 番目の名前として挙げられる。 *tīśānaḥ prāṇadaḥ prāṇo jyesthaḥ śreṣṭhaḥ prajāpatiḥ/ hiranyagarbho bhūgarbho mādavo madhusūdanaḥ// VSN 21*。
- (14) Abegg 1921 に従って、*’nimiṣakṣetre* を *nimiṣakṣetre* と訂正して読む。Wood & Subrahmanyam 1911 は「眠らない者の土地 (the field of the sleepless Ones)」, ヒンディー語訳は「神の土地 (*deva-kṣetra*)」と訳す。後者は「*animiṣa* (瞬きをしない者) = 神」という解釈にもとづくものであろう。この点については、Abegg 1921, p.32, n.6 等を参照。
- (15) Wood & Subrahmanyam 1911 は、*pāda ab* を前の詩節の続きと解していると思われる。その場合は、「同様に、輪廻の苦しみ、その苦悩を滅ぼす手段についても〔聞きたいと思います〕」となるだろう。
- (16) ハリ (*hari*)。VSN では、650 番目の名前として挙げられる。 *kālaneminihā vīraḥ śauriḥ śūrajaneśvaraḥ/ trilokātmā trilokēśaḥ keśavaḥ keśihā hariḥ// VSN 82*。シャンカラ (*Śaṅkara*) 作と伝えられる注釈では、原因もろとも輪廻を取り除く (*harati*) がゆえに、ハリ (*hari*) と呼ばれると語源解釈する。 *sahetukasamsāraṃ haratīti hariḥ// Śāṅkarabhāṣya on VSN 82*。
- (17) ヴィシュヌの住処。Abegg 1921, p.33, n.6 等を参照。
- (18) Wood & Subrahmanyam 1911, Abegg 1921 は「発音しやすい (*easily pronounced, Leicht auszusprechen*)」と解する。しかしながら、*sugamam* にそこまでの意味を込めるのは難しく、また、次の *jihvā ca vaśavartinī* (舌が名前に従う) が発音しやすいことを表していると考えられるため、従わなかった。
- (19) ヴィシュヌの名前を唱えることの果報については、GPS 8.12 以下を参照。
- (20) 神格化された名馬として『リグ・ヴェーダ』10.178 で讃歌を捧げられているが、後にガルダの別名となった。該当箇所和訳は、辻 1970, pp.215-216 を参照。
- (21) この *dhanamānamadānvitāḥ* という複合語の解釈は、先行研究でもそれぞれ異なっているが、この詩節の *pāda ab* と同文の *Bhagavadgītā* (以下、BhG) 16.17ab に対するシャンカラの注釈に従った。 *dhanamānamadānvitā dhananimitto māno madaś ca, tābhyāṃ dhanamānamadābhyāṃ anvitā/ Śāṅkarabhāṣya on BhG 16.17 (The Bhagavad-Gita with Eleven Commentaries. Ed. Shastri Gajanana Shambhu Sadhale. Bombay: The "Gujarati" Printing Press, 1935)*。Abegg 1921 は、シャンカラと同様に「財産ゆえの驕

- りと高慢に満ちている (seines Besitzes wegen von Stolz und Übermut erfüllt)」と解するが、Wood & Subrahmanyam 1911 は「財産に関する驕りに酔っている (intoxicated with the pride of wealth)」, ヒンディー語訳は「財産と驕りに関して酔っている」と解する。
- (22) この詩節と同文の BhG 16.16 に対するシャンカラの注釈に従った。 *anekacitta-vibhrāntā uktaprakārair anekaiś cittair vividhaṃ bhrāntā anekacittavibhrāntāḥ/ Śāṅkara-bhāṣya* on BhG 16.16. Abegg 1921 は「様々なものを考えることにより錯乱している者 (wer durch das Denken auf allerlei Dinge verwirrt ist)」, ヒンディー語訳は「様々な対象に執着することによって心が錯乱している者」と解する。
- (23) ヒンディー語訳は 1.22ab までを一区切りとし, *grhe* を 1.22ab にかけて解する。
- (24) 体内の火については, 例えば, *Carakasamhitā* (以下, CS) の次のような記述を参照。 *āyur varṇo balaṃ svāsthyaṃ utsāhopacayau prabhā/ ojas tejo 'gnyaḥ prāṇāś coktā dehāgnihetukāḥ// śānte 'gnau mriyate, yukte ciraṃ jīvaty anāmayaḥ/ rogī syād vikrte, mūlam agnis tasmān nirucyate// CS cikitsāsthāna 15.3-4.*
- (25) インドの伝統医学では, 風の性質を持つヴァータ (*vāta*), 火の性質を持つピッタ (*pitta*), 水の性質を持つ (*kapha*) という 3 つの病素 (*doṣa*) の質的・量的変化によって, 身体的な病気の原因を説明する。山下 2006, p.410 を参照。ヴァータの諸機能については, CS の *sūtrasthāna* 第 13 章で説明される。該当箇所の和訳は, 矢野 1988, p.84 以下を参照。
- (26) *ghuraghurāyate. ghuraghurā* というオノマトベから作られた動詞で, 直訳すると「グラグラという音を鳴らす」となる。
- (27) ヴァータは, プラーナ (*prāṇa*), ウダーナ (*udāna*), サマーナ (*samāna*), ヴィヤーナ (*vyāna*), アパーナ (*apāna*) という 5 種類からなる。そのうちのプラーナは, 呼気と吸気よりなり, 生命現象, あるいは生命そのものであるとされる。矢野 1988, p.84 を参照。
- (28) インドの神話的な時間単位のひとつで, プラフマー神の一日に相当するとされる。詳細は, 定方 2011, p.97 以下を参照。
- (29) 一方, 有徳な人物の氣息は, 上方の穴から出ていくとされる。この点に関しては, GPS 9.36; Abegg 1921, p.37, n.6 を参照。
- (30) ヒンディー語訳は, *sarabhasekṣaṇau* の *īkṣaṇa* を眼と解しており, それに従うならば, 「狂暴な目つきをしている」といった訳になる。
- (31) *kaṭakaṭāyatau. kaṭakaṭā* というオノマトベから作られた動詞の過去分詞で, 直訳すると「カタカタという音を鳴らす」となる。
- (32) このような身体に関する記述は, 『マヌ法典』 12.16 にも見られる。「悪行をなす人間たちのために, 死後の激しい苦しみに対応する別の丈夫な身体が五物質要素 (地, 水, 火, 風, 空) から造り出される」(和訳は, 渡瀬 2013 による)。詳細に関しては, Abegg 1921, p.38, n.5 を参照。
- (33) Wood & Subrahmanyam 1911, Abegg 1921 は, *balāt* を「力づくで長い道のりを連れて行く (*führen sie es gewaltsam auf dem weiten Wege fort*)」というように, *pāda c*

の内容にかけて解するが、pāda の切れ目を考慮して、ヒンディー語訳と同様に解釈した。

- (34) クンビーパーラカなどの地獄に関しては、21 種類の地獄を列挙する GPS 3.61-64 を参照。
- (35) Abegg 1921 は arka の訳がなく（訳し漏れか？）、davānalānila に関しては、「燃える森から吹く風（Winden die aus brennenden Wäldern kommen）」と解する。
- (36) Abegg 1921 と同様、pāda cd の yathā pāpīyasā nītas を *Bhāgavatapurāna* 3.30.23 の pathā pāpīyasā nītas という読みに従って訳す。Wood & Subrahmanyam 1911 は、「このように非常にみじめに闇を通してヤマの住処へ連れて行かれます（in this way, very miserably led through the darkness to the abode of Yama）」、ヒンディー語訳は、「悪人のような闇に満ちたヤマの世界へ連れて行かれます」と訳す。
- (37) 1 ムフルタは、1 日の 30 分の 1（= 48 分）とされる。詳細については、Abegg 1921, p.40, n.3 等を参照。
- (38) ヒンディー語訳の解釈に従った。Wood & Subrahmanyam 1911 は、bhayam を yamam にかけて「恐ろしいヤマ（the fearful Yama）」と訳し、Abegg 1921 は、「ヤマとその恐ろしさ（Yama und seine Schrecken）」と訳す。
- (39) Abegg 1921 は、「欲望（Verlangen）」と解する。
- (40) GPS 8.28 以下を参照。
- (41) Wood & Subrahmanyam 1911 とヒンディー語訳は nāstikas と pātākī を同格と解し、Abegg 1921 は並列的に解する。nāstika を、Wood & Subrahmanyam 1911 は Denier（否定論者）、Abegg 1921 は Gottesleugner（無神論者）と訳すが、哲学の世界では、主として、ヴェーダの権威や業の法則、輪廻転生などといった宗教的なものを否定する者たちを指す。
- (42) 祖霊祭については、『マヌ法典』3.82-83 で、以下のように述べられる。「日々、食べ物、水、牛乳、根あるいは果実によって祖霊祭を行ない、祖霊たちを喜ばせるべし。五大祭儀に属する〔日々の祖霊祭〕において、祖霊のために少なくとも一人のブラーフマナに食事をもてなすべし。しかしこの場合、決してヴィシュヴァデーヴァに関係してブラーフマナに食事を出してはならない」（和訳は、渡瀬 2013 による）。
- (43) ヒンディー語訳に従った。Wood & Subrahmanyam 1911 は「向上させる（uplift）」、Abegg 1921 は「役立つ（zugute kommen）」と訳す。
- (44) 死霊（preta）の姿については、GPS 7.28 を参照。
- (45) この詩節の pāda ab は、GPS 5.57cd と同文である。
- (46) Abegg 1921, p.41, n.6 で指摘されているように、ダブルミーニングとなっている。dvija という語は、卵として生まれ、その後、卵から再び生まれる鳥を意味すると同時に、入門式において師のもとで象徴的に生まれ変わる再生族、すなわち、バラモン、クシャトリア、ヴァイシヤの 3 階級を意味する（この詩節においては、ガルダはカシヤパの息子であるため、バラモンを指す）。
- (47) Wood & Subrahmanyam 1911 は、jantur niṣpannadehaś ca を 10 日目に起こるものと

解するが、ca の位置を考慮すると、Abegg 1921 やヒンディー語訳のように9日目と解釈すべきであろう。

- (48) Wood & Subrahmanyam 1911 は、bhuñkte を対象を明示することなく「食べる (eat)」と訳し、ヒンディー語訳も同様に解していると思われる。Abegg 1921 は、「死霊に対する捧げ物を食べる (genießt er das Totenopfer)」と対象を明示して訳す。
- (49) ヴァイタラニー川については、GPS 2.15 以下を参照。
- (50) 1 ヨージャナ (yojana) は4 クローシャ (krośa) に相当し、9 マイル (= 14.4841 キロメートル) に相当する。
- (51) 法の王 (dharmarāja)
- (52) Abegg 1921, p.43, n.7 によれば、これら 16 の町の名前は、他の古譚などに対応するものが見られず、GPS に独自のものと考えられる。
- (53) Abegg 1921 は、dharmabhavana を町の名前を表す固有名詞と解し、ヒンディー語訳は、dharmarājan の bhavana (法の王=ヤマの住処) と解している。
- (54) yāmyapāśa という語を、Wood & Subrahmanyam 1911 は同格限定複合語で「ヤマの縄」と解するが、格限定複合語で解する Abegg 1921、ヒンディー語訳に従った。
- (55) ケーシャヴァ (keśava). VSN では、23 番目、648 番目の名前として挙げられる。yogo yogavidān netā pradhānapuruṣeśvaraḥ/ nārasimhavaṇuḥ śrīmān keśavaḥ puruṣottamaḥ// VSN 13; kālaneminihā vīraḥ śauriḥ sūrajaneśvaraḥ/ trilokātmā trilokeśaḥ keśavaḥ keśihā hariḥ// VSN 82. 注釈では、髪 (keśa) が美しい (va) 者という解釈を筆頭に様々な解釈が見られる。
- (56) Abegg 1921 に従い、yaḥ pibet を yat pibet と訂正して読む。
- (57) ヒンディー語訳は、ghorair (獐猛な、恐ろしい) が śvabhir (犬によって) だけを限定すると解する。
- (58) このような森は、『マヌ法典』4.90, 12.75 では、地獄の名称として述べられている。
- (59) ヒンディー語訳は、ugre (恐ろしい) という語を jale (水に) にかけて解するが、pāda の切れ目などを考慮すると、Wood & Subrahmanyam 1911 や Abegg 1921 のように tamasi にかけて解釈するべきであろう。
- (60) Abegg 1921 は、kṣārakardamavṛṣṭi を「腐食性の物と排泄物」と解する。
- (61) ヴァイタラニー川に関する詳しい情報は、Abegg 1921, p.47, n.2 を参照。
- (62) Abegg 1921 は、māṃśaśonitakardamā という複合語を、「肉片と血と排泄物に満ちている (von Fleischstücken, Blut und Exkrementen erfüllt)」と解する。
- (63) Abegg 1921 は、keśaśaivāla という語を「〔浮遊する〕毛髪と海藻 (schwimmenden Haare und Wasserpflanzen)」というように並列複合語として解する。
- (64) Abegg 1921 は、mahāgrāha を「大きな猛獣 (großen, reißenden Tieren)」と訳して、動物名を特定していない。
- (65) 底本の vathate を kvathate と訂正して読む。
- (66) Abegg 1921 は、vāyasaiḥ を「その他の大きな鳥 (andern großen Vögeln)」と訳して、動物名を特定していない。
- (67) Abegg 1921 は、śiśumāra をアリゲーター科のワニ (Alligator), makara をクロコダ

イル科のワニ (Krokodil) と解する。

- (68) Wood & Subrahmanyam 1911 は、「その川は血で覆われ、多くの泡が流れています (That river, flowing with blood, carrying much foam)」, Abegg 1921 は、「その川には多くの血と泡が流れています (Viel Blut und Schaum führt der Strom mit sich)」, ヒンディー語訳は「その川は泡だらけの血の流れで覆われています」と訳して、それぞれ微妙にニュアンスが異なるが、格関係を厳密に踏まえるならば、「その川には多くの泡が流れており、その泡が血で塗れている」という状況である。
- (69) パーターラ (pātāla). 14 ある世界のひとつ。
- (70) ヒンディー語訳は、pr̥ṣṭhe を pāda cd にかけて、「背中に多くの鉄の重荷を担って道を進みます」と訳す。
- (71) 仏教などと同様、人間としての生まれが得難いことについては、GPS でも繰り返し説かれる。GPS 6.39, 8.95, 14.79, 16.15 を参照。
- (72) 供物を食べる者 (hutāśana). Abegg 1921 はアグニと解する。
- (73) 三十の者 (tridaśa)
- (74) Wood & Subrahmanyam 1911 は、tīrthasevā を「聖地における奉仕 (service at a place of pilgrimage)」と解する。
- (75) 身体を持つ者 (dehin)
- (76) ヒンディー語訳は、「その果報を享受しなさい」と訳す。
- (77) 神々の川 (surāpagā)
- (78) Abegg 1921 は、pāda の切れ目を意識して、「バラモンの集まりやガンジス川を敬ったこともなく、善き人々を訪れたことも、奉仕したこともありません (Die Priesterscharen und die Gangā habe ich nicht verehrt, tugendhafte Menschen habe ich nicht besucht und ihnen keine Ehre erwiesen)」と解するが、ここでは意味を優先して、従わなかった。
- (79) Abegg 1921 は、注釈に従って、jña を古譚などの語り手、pūjita を贈り物をする人と解する。
- (80) Abegg 1921 は、注釈に従って、両親 (とりわけ夫の) と解する。Abegg 1921, p.50, n.10 を参照。
- (81) チャンドラーヤナについては、『マヌ法典』11.217 で、以下のように述べられている。「黒の半月の間、〔食事の量を〕一口ずつ減らし、白い半月の間は〔一口ずつ〕増やし、一日三回〔朝、正午、夕に〕沐浴する。これはチャンドラーヤナと言われている」(和訳は、渡瀬 2013 による)。
- (82) Wood & Subrahmanyam 1911 は「チャンドラーヤナ、あるいは厳密な誓戒にもとづく月々の断食」というように、月々の断食 (māsopavāsa) の中にチャンドラーヤナ (cāndrāyaṇa) と厳格な誓戒 (savistara-niyama) が含まれると解する。
- (83) Wood & Subrahmanyam 1911 は「どうして私は人間として生まれたのでしょうか (Whence did I attain this human state ?)」というように過去のこととして訳し、ヒンディー語訳は「私の人間としての生まれ (身体) はどこへ行ってしまったのでしょうか」と訳す。

- (84) Abegg 1921 は「風に吹かれて (mit dem Wehen des Windes)」と解する。
- (85) 16 の町のうちの 1 番目の町で、町の名前は「魅力的な町」という意味。GPS 1.59 を参照。
- (86) この川については、Abegg 1921, p.51, n.8 を参照。
- (87) Abegg 1921 は「プリアダルシャナという [名の] ニヤグロダ樹 (der Nyagrodha-Baum (Ficus Indica) Priyadaršana)」というように、木の名前と解する。
- (88) Wood & Subrahmanyam 1911, Abegg 1921 は「ヤマの召使たちと休憩をとります (ruht er mit den Schergen Yama's aus)」と訳すが、ヒンディー語訳のように「具格 + prāpyate (使役形の受動態)」の形を「～に～させられる」という意味に解釈した。
- (89) Abegg 1921 は、「最初の月の団子 (den Piṇḍa des ersten Monats)」と解する。
- (90) 16 の町のうちの 2 番目の町で、町の名前は「太陽の息子 (= ヤマ) の町」という意味。GPS 1.59 を参照。
- (91) 底本の cāntasamyuktam を cānnasamyuktam と訂正して読む。三半月の終わりに行われるサピンディーカラナ (死者を祖霊の仲間入りさせる祭儀) についての記述は、GPS 13.28 に見られる。サピンディーカラナについては、『マヌ法典』3.247, および渡瀬 2013 の該当箇所の和訳に対する注を参照。
- (92) 16 の町のうちの 3 番目の町で、町の名前は「山の王の場所」という意味。GPS 1.59 を参照。
- (93) Wood & Subrahmanyam 1911 は、「この町を去る (leaves that city)」と解する。
- (94) 死霊に捧げる衣に関する記述は、GPS 13.89 にも見られる。
- (95) Abegg 1921 は「第 3 の月の終わりに (Am Ende des dritten Monats)」と解するが、原文は samprāpte であって、samāpte ではないため、従わなかった。
- (96) 16 の町のうちの 4 番目の町で、町の名前は「ガンダルヴァ (= 天の楽隊) の町」という意味。GPS 1.59 を参照。
- (97) 16 の町のうちの 5 番目の町で、町の名前は「岩石が降ってくる町」という意味。GPS 1.59 を参照。
- (98) 16 の町のうちの 6 番目の町で、町の名前は「クラウンチャ鳥の町」という意味か? GPS 1.59 を参照。
- (99) Abegg 1921 は、pāda の切れ目を意識して、「クラウンチャの町にいる間に、死霊は手で捧げられたものを食べます。第 5 の月の団子を食べた後は、クルーラの町へ行きます (Während der Preta sich in Krauñcapura aufhält, genießt er, was man ihm mit eigener Hand gespendet hat; wenn er den Piṇḍa des fünften Monats verzehrt hat, wandert er nach Krūrāpura)」と解する。
- (100) 16 の町のうちの 7 番目の町で、町の名前は「残酷な町」という意味。GPS 1.59 を参照。
- (101) これについては GPS 12.65 にも記述があり、そこでは、12 か月の各月、半月、3 番目の半月、6 か月が終わる前、1 年が終わる前に、団子を捧げるべきことが記されている。

- (102) 16の町のうちの8番目の町で、町の名前は「様々な宮殿のある町」という意味。ただし、GPS 1.59では、町の名を「ヴィチトラバヴァナ (vicitrabhavana)」としている。
- (103) この小舟に関しては、GPS 8.73を参照。
- (104) ヴァイタラニー川を渡るための牛の布施についての記述は、GPS 8.57にも見られる。
- (105) 底本の *kathyate* を *kvathyate* と訂正して読む。また、罪人を見て煮えたぎるヴァイタラニー川に関する記述は、GPS 2.18にも見られる。
- (106) 16の町のうちの9番目の町。町の名前は「多くの災いがある町」という意味。GPS 1.59を参照。
- (107) 16の町のうちの10番目の町。町の名前は「苦しみをもたらす町」という意味。GPS 1.59を参照。
- (108) 16の町のうちの11番目の町。町の名前は「様々な泣き叫ぶ声が聞こえる町」という意味。GPS 1.59を参照。
- (109) Wood & Subrahmanyam 1921は、*nānākrandagaṇa* を「様々なに泣き叫ぶ多くの人々 (many people crying in agony in various ways)」と解し、ヒンディー語訳も同様に解する。
- (110) 16の町のうちの12番目の町。町の名前は「非常に熱い場所」という意味。GPS 1.59を参照。
- (111) 16の町のうちの13番目の町。町の名前は「恐ろしい町」という意味。GPS 1.59を参照。
- (112) 16の町のうちの14番目の町。町の名前は「雨が降り注ぐ町」という意味。GPS 1.59を参照。
- (113) 16の町のうちの15番目の町。町の名前は「寒さに満ちている町」という意味。GPS 1.59を参照。
- (114) Wood & Subrahmanyam 1911は、*hima* という語を「ヒマーラヤ」という意味に解す。
- (115) 底本の *pretyāsanne* を *pratyāsanne* と訂正して読む。
- (116) 16の町のうちの16番目の町。町の名前は「多くの恐怖を引き起こす町」という意味。GPS 1.59を参照。
- (117) 注釈では、象徴身 (*liṅgaśarīra*) を指すとされる。象徴身は、微細身 (*sūkṣmaśarīra*) と呼ばれ、輪廻を通じて個我に従い、死に際しても滅びない身体のこと。Abegg 1921, p.57, n.2等を参照。
- (118) 責め苦を受ける身体 (*yātanādeha*) については、GPS 1.33を参照。
- (119) 法の王 (*dharmarāja*)
- (120) ヤマの町の4つの門に関する記述は、GPS 4.3にも見られる。それによれば、3つの門は有徳な者 (*dhārmika*) が、南の門は罪人 (*pāpin*) が通るものとされる。
- (121) ケーシャヴァ (*keśava*)。注 55を参照。
- (122) 底本の *śrīṇṣva* を *śrīṇṣva* と訂正して読む。

- (123) Abegg 1921 は 24 ヨーヅャナ (Vierundzwanzig Yojana) とするが、誤訳か？
- (124) 法の王 (dharmarāja)
- (125) 底本の sarvaṃ を sarve と訂正して読む。
- (126) 「法を旗印とする者」の意。Abegg 1921, p.59, n.2 によれば, dharma はヤマを指し, 「ヤマを旗印とする者」を意味するとされる。
- (127) チトラグプタが人々の善業と悪業を書き留めて記録することは, GPS 14.16 にも記されている。
- (128) 法の王 (dharmarāja)
- (129) 法の王 (dharmarāja)
- (130) 底本の tathā bhūtāḥ を tathābhūtāḥ と繋げて読む。
- (131) ヒンディー語訳は, pṛthak という語を, 男性の「シユラヴァナ」という呼び名との対比ではなく, 「[彼らの妻の] それぞれが」といった意味に解する。
- (132) 法の王 (dharmarāja)
- (133) 先行する訳では, いずれも proktā を「[ヤマの前で] 報告する」と解しているようであるが, ここでは, 「真実を語る者」(satyavādin) が, ヤマの面前では, その真実を語るという性質ゆえに, 一転して「苦しみをもたらす者」(duḥkhadāyin) と呼ばれる (proktāḥ) ようになるという意味に解釈した。
- (134) Abegg 1921 は「3 ヨーヅャナの高さであり (Drei Yojana's hoch ist er)」と解するが, vistāra は横の広がりとして解釈すべきであろう。
- (135) 底本の saṅgame na を saṅgameṇa と繋げて読む。
- (136) Wood & Subrahmanyam 1911, Abegg 1921 は, pāpānām を「罪人」の意味に解するが, ここでは pāda a の tān を ājñāpayati の目的語と考え, 「[犯した] 罪」と解釈した。ヒンディー語訳も「罪」と解するが, 「彼らの罪を拭い去るのに相応しい」というように補って訳す。
- (137) シャールマリー樹は GPS 4.27 以下でも言及される。また, GPS 3.61 では地獄の名前として言及される。この木に関する詳細は, Abegg 1921, p.64, n.1 を参照。
- (138) Abegg 1921 に従って補った。
- (139) カラスに対する捧げものに関する記述は, GPS 11.30 にも見られる。
- (140) Wood & Subrahmanyam 1911 は, 「お前は犬やカラスに半口分の食べ物すら捧げることがない (You did not give even half a mouthful of food to the dog or the crows)」というように pāda ab をまとめて訳す。ただし, 否定辞が2つあることなどを考慮すると, この解釈には無理があると思われる。
- (141) ヤマとチトラグプタのマントラについては, Abegg 1921, p.65, n.1, および n.2 を参照。
- (142) 「ハンタ」という音 (hantakāra)。GPS 13.51 によれば, 4 口分の食べ物を捧げる時の掛け声とされる。他の文献では, 6 口分の食べ物を捧げる際にも用いられる。この点については, Abegg 1921, p.65, n.6 を参照。
- (143) 底本の śubham を bhṛṣam と訂正して読む。
- (144) ハリ (hari)。注 16 を参照。

- (145) 底本の *vidhā* を *dvidhā* と訂正して読む。
- (146) Abegg 1921 は、「剣で頭を割られる (*wird mit Schwertern der Kopf gespalten*)」と解する。
- (147) Wood & Subrahmanyam 1911 は「燃え上がっている炭によって密に囲まれ、松明で包み込まれて」というように分けて解するが、*aṅgāraiḥ* ではなく *sāṅgāraiḥ* である点などを考慮するならば、この解釈には無理があると思われる。
- (148) 底本の *dhyāyante* を *dhmāyante* と訂正して読む。
- (149) ヒンディー語訳は、*āmiṣagrđhnubhiḥ* を *grđhrair* の限定要素とは考えず、「鷺と〔その他の〕肉食の鳥たち」と解する。
- (150) 底本の *niṣkupyante* を *niṣkr̥ṣyante* と訂正して読む。
- (151) Wood & Subrahmanyam 1911, Abegg 1921 は「彼らがこのように争っている間に」と解するが、従わなかった。
- (152) 840 万という数字に関しては、GPS 4.62, 16.13 にも見られる。
- (153) その他の様々な文献に見られる地獄の数に関しては、Abegg 1921, p.68, n.5 を参照。
- (154) Wood & Subrahmanyam 1911 は、マハーラウラヴァシャーリマリー (*māhāraura-vaśālmali*) で1つの地獄の名前とし、3.62の *kākola* をカーカ (*kāka*) とウール (*ūlu*) に分ける。
- (155) 底本の *nānāpāvīpākāś* を *nānāpāvīpākāś* と訂正して読む。
- (156) 底本の *mithaḥ saṅgena* を *mithaḥsaṅgena* と繋げて読む。
- (157) 家族の養育に関する記述は、GPS 1.25, 6.18 にも見られる。
- (158) 底本の *śamale* を、Abegg 1921, p.73, n.1 が提示する *Bhāgavatapurāṇa* の *śamalaṃ* という読みに従って訳す。
- (159) Wood & Subrahmanyam 1911 の訳は、「財産を奪われた病人が、家族の扶養を享受するように」とも解せるが、*kuṭumbapoṣasya* のかかる位置が明確でない。また、ヒンディー語訳は、*ātura* を比喩に含めずに訳す。
- (160) 人間界に生まれることを意味する。